

## 前期シュタインの社会思想研究(3)ルソー

著者	柴田 隆行
著者別名	SHIBATA Takayuki
雑誌名	東洋大学社会学部紀要
巻	41
号	2
ページ	51-62
発行年	2004-02
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00003147/">http://id.nii.ac.jp/1060/00003147/</a>



## 前期シュタインの社会思想研究 3 ルソー

### Wie studierte der junge Stein die Geschichte der sozialen Gedanken? (3) Rousseau

柴田 隆行

Takayuki SHIBATA

#### 1. 法哲学史上のルソー

「ゲルマン・ヨーロッパの全民族のなかでフランスはまだ法史を持たない唯一の国である」<sup>(1)</sup>とシュタインは言う。本稿第1回に述べたように、法史に関するフランスのこのような状況のなかで最も注目すべき著作家はギゾーである、とシュタインは考えているが、1846年に書かれたとされるキール大学での講義録「法哲学史」では、モンテスキューとルソーのみが取り上げられている(Taschke, 133-136)<sup>(2)</sup>。しかし、その量は決して多くない。まずはこれを読んでおこう。

フランスでは、ルイ14世のもとで王政が人民や国会に対し決定的な勝利をおさめていた。階級対立が激化し、新しく生まれる理念と古い秩序のあいだの矛盾はたんなる国王の人格性と権利に対する矛盾にとどまらず、社会全体の権利と状態に対する矛盾となった。フランスにおける契約論や国家論は、こうした社会の問題として捉えられなければならない。このように前置きをして、シュタインは個別にはモンテスキューとルソーを講じている。シュタインによれば、モンテスキューは、フランスの法哲学上固有の位置を占めており、「フランスの法史を代表する最初のひと」である。シュタインがモンテスキューをこのように高く評価する背景には、モンテスキューが「法史一般だけでなく、ゲルマン法史を発展させるという理念を貫徹した」とするシュタインのゲルマニスト的な立場が見え隠れする。しかし、つぎのルソーとの関係を視野においてみると、そのような立場とは別の、1841年のパリ滞在以来のシュタインの社会観、すなわち、平等原理の発展 という観点があることがわかる。

シュタインはつぎのようにモンテスキューの業績を要約する。モンテスキューにとって、フランスの国情が転倒し矛盾していることは明らかだった。かれはこの思想を解明しようとした。いったいどのようにしてこうした状態が生まれたのか、恣意的なものなのか、あるいは根の深いものなのかを見出そうとした。モンテスキューは「アリストテレスのようなやり方で、社会のエレメントを王政の理念と関連させ、王政に賛成するエレメントと反対するエレメントを研究した」。ここで言う

「アリストテレス的やり方」とは、本稿前号で詳細に検討したように、プラトンの抽象的な見方ではなく、「具体的な見方」(Taschke, 100)、すなわち「事実としての諸制度の観察。現実の諸国家の比較。所与の国家をもとにした真の国家の探求」(Taschke, 102)を指すと思われる。だが、そのようにモンテスキューの研究態度を評価するシュタインであるが、上述のように、ここでシュタインがとくにモンテスキューを取り上げる理由は、モンテスキューの具体的な王政分析ではなく、モンテスキューが「人間の根源的な状態を平等ないし自由と見て、どのような権力がこれを現状から排除したか」に関する「法則」を捉えようとした点にある。平等で自由であるという人間の根源的な状態が現実には失われている根拠としての「法の発展の法則」を捉えなければならない。それをつかみ、その「法則から現在の状態を概念把握し、したがってまたその未来を提示しなければならない」。そのために、具体的には「普遍的なものに対する諸個人の関与の程度と、人格的發展の程度との関係」を明らかにする必要がある。これを行ったのがモンテスキューである。このようにシュタインは評価している。だが、1846年の講義録にはこれ以上の記述がなく、モンテスキューの理念の後継者としてヴォルテールの名を挙げるにとどまっている。

法哲学史に位置するフランス学派として、つぎにシュタインはルソーに言及する。ルソーは、「社会における平等の原理」を問題とし、何が差別を産むかの問いを探究した、とシュタインは述べる。しかし、そこからルソーの『人間不平等起源論』の分析には入らず、「教育：エミール」と注記し、さらに「自然状態的な教育による自然状態。これはいまや『社会契約論』のなかで国家にも適用されることになる」と付言する。そして、『エミール』に言及せずに『社会契約論』に移り、ルソーにおいては、「国家と国家権力が万人の意志の結果とされるが、それは、万人の意志が同時に個々人の意志でありつづけるかぎりである」。このようなことがありうる行為が社会契約であり、個人はこれによって「自分の自立性の一部を放棄する」。だが、この契約理論には第二の内容があり、それは「普遍的なものの自立性のもとで個体的自立性を維持すること」である、とシュタインは要約する。ここに自由と平等の最大の問題があり、フランス革命とその後の展開のなかで 平等原理 はその真価を問われるわけだが、シュタインはこれ以上のことはここではいっさい展開していない。ルソーにつづけて「百科全書派：自由の理念。エルヴェシウス：平等の理念。シェイエス：実践的応用と終止符。第三身分とその権利。革命」というメモ書きを残しているにすぎない。

タシュケ編集の講義録では、この記述から少し離れた箇所に、平等原理 についてつぎのような記述が見られる。フランスの法哲学の出発点は、「人間の平等が人間の根源的な権利であるという命題ないし意識」であり、その根本命題は「自由は平等である」ということである。したがって、あるべき国家の理念は、「最高権力を産み出すが、それにもかかわらず、平等が維持される」ことである。このように、フランスにおいては、生活のさまざまな面で「人間の平等」が貫徹されることが求められているとして、シュタインはつぎのようにメモしている。「宗教への適用：ヴォルテール・ディドロ・百科全書派」、「教育への適用：ルソーのエミール 教育による平等の理念」、「権利への適用：マブリ 財産の平等」、「慣習への適用：フランスの解釈による自然状態の理念 エル

ヴェシウス」,「国家への適用:ルソー 社会契約」(Taschke,135)。

以上が、シュタインの1846年「法哲学史」の講義録におけるフランスについての言及のいっさいであるが、これだけでも、シュタインが、フランスの法史において貫かれている法則は 平等原理にある、と捉えていることを明確に見てとることができる。このようなシュタインの見方が、さらに具体的にフランスの近代史のなかに位置づけられて、展開されている著作をわれわれはすでに手にしている。それが、1842年の若きシュタインの代表作『今日のフランスにおける社会主義と共産主義』である。つぎにわれわれは、これを読むことにしよう。

## 2. フランス近代史における平等原理の発展とルソーの役割

これまでも何度か言及したように、シュタインは、1841年のフランス留学中の体験から、これからは政治ではなく社会が問題となると強く意識するようになった。人民の生活全体を捉えるのに政治的な考察ではもはや不十分であって、国家よりもいっそう包括的な概念である「社会」という概念でこれを捉えなければならない、とシュタインは繰り返し強調する(SC-31,j48)<sup>(3)</sup>。フランスに法史がない理由は、フランスでは国家思想が稀薄だからである。そもそも「国家」というドイツ語を翻訳できるフランス語が存在しない、とシュタインは指摘して、こうつづける、「これに対して、フランスのあらゆる哲学者のなかに、社会の概念、つまりソシエテが見られる。かれらは、社会の状態〔エタ・ラ・ソシエテ〕、社会の形態〔フォルム・ド・ソシエテ〕、社会の権利〔ドロワ・ソシエテ〕、社会契約〔コントラ・ソシアル〕を論じる。しかも、国王の人格と同一視された国家についての哲学的研究は、ルイ14世の『朕は国家なり〔レタ・セ・モワ〕』という言葉でまったく消え去ったかのようだ。国家に代わって統治といういっそう一面的な概念、つまりド・グヴェルヌマンが現れた。かくして、ヴォルテールからレルミニエールまでの法哲学は、社会と統治の両部門に本質的に分かれる」SC-32,j49)。

シュタインはまずヴォルテールについて触れ、ヴォルテールの1753年の『国家行政の思想』と1765年の『共和主義の理念』からつぎの一文を引用する。すなわち、前者からの引用「すべての人間は生まれつき平等である。この平等は従属関係の絶滅ではない。われわれはみな平等に人間ではあるが、社会の平等な一員ではない。すべての権利は平等にサルタン〔主君〕にもボスタンジ〔従者〕にも属する」。後者からの引用「われわれは貴族と平民との憎むべき屈辱的な区別を認めない。これが最初に意味していたのは、領主と奴隷にほかならない。われわれはみな平等に出生し、かくして生きる。そこで、われわれは尊厳を委ねたのである。それを保持するのに最も適しているとわれわれに思えた人たちにである」(SC-37,j55)。この引用のあと、シュタインはヴォルテールを評して、ヴォルテールは共和主義者でも革命家でも法哲学者でもない、かれは自分の原理を究極まで推し進めることができなかったとし、それゆえにさらに2人の人物の登場が決定的な意味を持

つことになった、と述べる。この2人とは、エルヴェシウスとルソーであり、かれらが平等原理の代表者である、とシュタインはつづける。ただし、エルヴェシウスは、ヴォルテールが遠回しでしか主張しえなかった平等原理、すなわち、「出生における万人の平等は精神的な平等でもあり、知性や教養の相違はすべて内的な差異にではなく、教育の差異に基づくという思想」を先駆的に表明しただけで、この原理を具体的に「力強く」展開したのはルソーである。

シュタインによれば、ルソーの『社会契約論』の本質的帰結は、平等原理を国法や社会の真の基礎として承認することではなく、  
「というも「平等理念など学問的に新しいものではなく、人民にとってもめずらしいものではなかったから」(SC-38,j56)、この原理から外れた現状を「たんなる強者の権利に基づくものだ」とした点にある。こう述べて、ルソーの言葉を引用する。「権力者には従え。もしそれが、力には屈せよ、という意味なら、その教訓は結構だが、よけいなものだ。その教訓に背くようなことがけっして起こらぬことは、私が保証する。すべての権力は神から出てくる。〔中略〕しかしすべての病気もまた神から出てくる。〔中略〕もし私が、森の奥で追いはぎに襲われたら 財布を隠せるときでも、良心的に財布をやる義務があるだろうか。そこで、力は権利を産み出さないこと、また、ひとは正当な権力にしか従う義務がないことを認めよう。」この言葉は、『社会契約論』と革命を密接に結びつける、とシュタインは言う。なぜなら、人民はものごとを真っ正直に理解するからである。すなわち、人民は、暴力的な行為を企てるとき、目的だけを神聖化せず、暴力それ自体を正当化する、というのも、自分たちが攻撃する事態が暴力に基づくものだからであり、暴力には暴力を、平等には平等を対置するだけだ、と人民は考えるからである。いかなる著書にも、著者自身が知る知らないにかかわらず、その著書の根本原理がわずかな言葉に凝縮されている箇所があり、『社会契約論』でもそれは言え、その一例がこの一節である、とシュタインは述べているが、これはルソーと平等原理の発展についての話題から外れるので、話を戻そう。

ヴォルテール、エルヴェシウス、ルソーらによって、平等原理の哲学的根拠である「人格性理念が、より抽象的な領域から国法および社会の実践的な領域へと移し入れ」られて、フランス哲学は平等思想となった。だが、とシュタインは指摘する、「その際、平等理念の内容により深く立ち入らなかったで、フランス哲学は、それ自体無規定的なもの〔精神的なもの〕の平等と規定的なもの〔法的なもの〕の平等との区別を見過ごした」がゆえに、平等原理に基づく人格性の権利と現状との矛盾の激化に対処できず、「フランス社会を革命へと進ませたあの深刻な対立」をもたらすことになった、と(SC-39,j57)。

ところで、「真の矛盾を条件づけたのは、フランスで平等原理の姿をとった人格性の理念であった」(SC-63, j87)とシュタインは述べるが、ここで簡単にかれの「人格性」概念について説明しておく必要があるだろう<sup>(4)</sup>。ただし、シュタインの人格性概念は、年代に従って少しずつ変化しているので、ここではあくまでもこの『今日のフランスにおける社会主義と共産主義』に限定して概説する。人格性とは、個々の人格ではなく人格一般を表し、いわば人間の類の本質であり、人格が一個の存在ではなく各人に必然的に備わる本質的存在者としてあるとき、それを人格性と言う<sup>(5)</sup>。シュタイン

によれば、「文明の概念は、人格性の概念が出現することによって、終局的な統一に達する」と言う(SC-20, j34)。というのも、人格的ということは個体的ということであり、財貨の人格的所有は排他的占有として実在するからである。「文明が普遍的財貨に対して占有者として対立させた個人は、人格一般にまで高まり、人格性そのものが普遍的財貨を占有すべきものとなる」(ibid.)。普遍的占有は他者を排除しないが、人格的占有は他者を排除するから、普遍的財貨である文明の概念と人格的所有とは矛盾する。こうして、人格的所有を廃棄しようとする思想が生まれる。これが共産主義である、とシュタインは述べている。こうして、フランスにおける平等原理の発展は、人格性という理念の発展過程であった。この平等が現実生活において事実的に否定されているのは、人格性の理念が占有の領域に入り込むことによって生じる。人格性の理念は、それ自体平等原理の基礎をなすが、同時にそれは現実占有と結びつく。そこに矛盾が生じる。「富裕者と非富裕者との不平等の出現は、平等原理と矛盾する。しかし、この不平等は人格的所有の法則に基づいている」(SC-64, j87)から、人格的所有の法則が存続するかぎり、平等を確保しながら同時に占有に基づく社会の発展をめざすという要求を統一的に実現することは不可能である。そこで、「平等原理は、この法則を意識することに至ったときから、必然的に人格的所有の理念に反対する。そして、平等原理は、占有をそれ自体不可欠なものとして承認しながら、あらゆる最高の発展の条件として占有の非人格性の原理を確認する。平等原理から出てきたこの帰結は、当初は不明瞭な感情としてのみ現れたが、占有の人格性のもとで苦しんでおり、しかも同時に、すべての人格の平等という要求を絶対的なものと認める階級、つまり非占有者の階級のなかに、当然その信奉者を見いだす」(ibid.)。平等原理からのこの帰結が、前述したように、あらゆる占有を否定する共産主義である。

共産主義がフランスに現れたのは、けっして偶然でもなければ突然でもない。「たいへん熱しやすい心を持ち、革命への勇気を呼び起こした火花」(SC-65, j88f.)、とシュタインはルソーを形容し、ルソーの『社会契約論』第1篇第38章からつぎの一節を引用する。「平等については、この言葉で富の程度が絶対に同じだと理解してはならない。そうではなく、いかなる市民も、それで他の市民が買えるほど豊かではなく、またいかなるひともし売り余儀なくされるほど貧しくはないということ、を、意味するものと理解しなければならない」。さらにそれにつけられた注、「だから国家に安定性を与えようと思うならば、両極端を接近させるべきである。百万長者と乞食のいずれをも認めてはならない。この2つの身分は本来、不可分なのだが、ひとしく公共の幸福に有害である。一方からは暴政の扇動者が生まれ、他方からは暴君が生まれる。公的な自由の取引が行われるのは、つねにかれらのあいだにおいてである。一方はこれを買ひ、他方はこれ売る」と。ところが実際には、ロベスピエールのもとで現実に支配を勝ち得たときもあったが、かれらの手中から支配権が滑り落ちてしまうや、最も貧しい人民大衆はルソーが厳しく有罪判決を下した富と貧困がさらに決定的になった、とシュタインは述べ、さらにそのような状況のなかでひとびとが古典的人物として賞賛し書物を読んだのはルソーだけではないとして、ルソーと同時代の神父マブリを名を挙げる。『立法権について』でマブリはつぎのように語った、としてその第1巻第3章から引用する。「所有権が

いつ確立されたのか、私には判断し難い。この点については、自分でも必ずしも十分満足できる推測は持っていない。もし私がわれわれの祖先への尊厳をあえて冒瀆するのを許されるならば、祖先がほとんど不可能な過誤を犯したと、祖先を批判してはならないだろうか。さらに、「自然はつぎのことを欲した。すなわち、市民の財産と地位の平等は国家繁栄の必要条件でなければならない。」

ルソーやマブリのこのような平等思想がフランス人民に与えた影響は計り知れない、とシュタインは評し、さらに、エルヴェシウスはその本来の意図がほとんど理解されなかったが、ルソーやマブリと同じレベルに立っていた、と言う(SC-66,j90)。エルヴェシウスは遺著『人間論』(1781年)第4篇第8章第3節で、「帝国人民の大半はまさに、不幸な人びとにちがいない。幸福をもたらすには何をすべきか。一方の富を減じ、他方の富を増やすこと。7、8時間の労働で自分と家族の必要に十分応じられるだけの安楽な境涯を貧者におくこと。そうすれば、貧者はほぼ十分幸福になりうる」と語るが、同時にかれは、「しかしながら法律を改善すれば、すべての市民は安楽な境涯におかれて幸福になることができるだろうか」と疑問を投げかけている。エルヴェシウスのこの問いはまさに共産主義が直面している問題であり、共産主義は、マブリ、ルソー、エルヴェシウスら「前世紀の哲学者たちによって目を覚まされ、事態の進展によって引き出された」とシュタインは総括する。そして、「われわれは、共産主義の理念が平等原理から必然的に生まれてきたことを示した」と付言する。そしてさらにつづける。恐怖政治が制圧されたあとでも、平等の要求は完全に静まり返ることではなく、フランス人民は、共和制国家が必ずしも満足の行くものではないことを学ぶとともに、自分たちに敵対する勢力が依然存在することも知っていた。そして、この敵が占有の不平等のなかに求められることをフランス人民に教えたのがバブーフであった。バブーフは、平等の概念すなわち「万人の同胞愛、万人の投票権、万人の享受に基づく、所有の新しい分配」(SC-67,j91)を求めたが、結社は密告され、バブーフは処刑された。しかし、かれの出現によって、共産主義が現実の運動としてフランスのプロレタリアートのなかに浸透していることが明らかとなった。

シュタインは、1842年の『今日のフランスにおける社会主義と共産主義』のあと、44年に「ドイツにおける社会主義と共産主義の瞥見、およびそれらの将来」、46年に「社会主義と共産主義との関係から見た労働の概念と労賃の原理」、48年に42年の著書的大幅改訂版、同年「フランスの社会主義と共産主義」ならびに「現代の社会運動」、そして50年に3巻本の『1789年から現代までのフランスにおける社会運動の歴史』、52年の「ドイツの社会主義」などの社会主義・共産主義関連著作を発表しているが、このうちルソーに言及しているのは、「現代の社会運動」と「ドイツの社会主義」だけであるので、これらを最後に簡単に見ておきたい<sup>(6)</sup>。

「現代の社会主義」によれば、社会主義の根本原理は人間の平等にあるが、「人間の平等という理念は、言葉の最高の意味でゲルマンの理念である」という言葉は意味深長である。人間は公共的に平等であり、人間の本性はいかなる差別も知らない。したがって、人間の自然状態とは平等の生活のことである。ルソーの根本思想は平等である。ルソーにとって「不平等は、人間の本質との絶対的な矛盾」であり、「ルソーこそ、従来の哲学が抽象的かつ概念的に承認してきた平等が、最後には

実践的に生活のなかに導入され、共和政によって国家のなかで、教育によって社会のなかで、実現されなければならない、という要求を掲げた最初のひとであった。シュタインはこのようにルソーを評価している。

「ドイツの社会主義」が書かれた1852年は、シュタイン自身深くかかわった、1848年革命を頂点とするシュレスヴィヒ・ホルシュタイン両公国のデンマーク王国連合からの独立運動が敗北し、シュタイン自身6月2日に「極左派の州議会議員として」活動した廉でキール大学教授の職を解任された失意の年であった。かれはこの論文以降は、晩年の1880年に「アメリカの社会主義と共産主義」を書いただけで、ほかに社会主義と共産主義の運動や思想についていっさいの著作を書いていない。その点で、この匿名論文は48年革命後の時点におけるドイツの社会主義・共産主義運動をかれなりの仕方でも総括するものと言える。ここでシュタインは、「ドイツにおける社会主義と共産主義の最初の登場——L・シュタイン」について言及している。著者はあくまでもシュタイン自身である。

シュタインによれば、ドイツの社会運動は最初、サン・シモンとフーリエというフランスの社会主義の指導者の仕事を引き継ぐかたちで始まったが、1840年初頭にはサン・シモンはドイツでまったく忘れ去られた。フーリエはこんな目に遭わなかったが、それはかれがドイツでほとんど知られていなかったからにすぎない。サン・シモンとフーリエの理論とその運動がドイツに本格的に紹介されるには、シュタインの42年の著作『今日のフランスにおける社会主義と共産主義』を待たなければならなかった、とシュタインは言う。

シュタインの見解の出発点は、とシュタインはつづける、ドイツにおける自由の理念と運動は本質的にフランスの発展を背後に持っていること、しかもそれは前世紀以来のことであり、ごく最近までドイツで起きることがらはフランスでの発展に依存していた、というものであった。フランスでは、ルソー以来、自由の理念が民衆のなかに息づいており、1789年以降の諸革命はこの理念の爆発であり結晶である。だが革命フランスのあの諸憲法のなかに自由の理念が現実叙述されているだろうか。このような憲法によって民衆のすべての要求が満足させられるのだろうか。もし満足しなかったら、この憲法を超えるものはどのようなものか。このような問いに対する答えは、ひとつにはプロレタリアートのなかに、他のひとつは平等原理のなかにある。「フランスにおけるプロレタリアートの事実が初めて無産大衆の存在を示した。かれらは、偶然や自らの罪によってではなく、財貨分配の国民経済学的法則によってすべての人格的発展の基礎すなわち占有を持たずに存在し、また存在しつづけなければならない人たちである。人間の平等原理は、すべての人間は本質上、それどころかその資質の面でも力の面でも平等であり、ただし実際には財産分配がかれらからこの平等を実現する手段を奪っている、という抽象的主張として存在するにすぎない。それゆえ人類の現実生活は人格性の最も内的な本質と絶対的に矛盾する。この高次の本質は、外的に制約され、その実現を財貨と占有によって奪われているので、この矛盾を生む原則と状況に対して断固として闘わなければならない。この要求は絶対的であり、永遠である。人間の全歴史はこの要求の実現の歴史にほかならない。」自由と平等という理念が物質的財貨によってのみ、また個々の社会的状況の秩序



においてのみその現実的形態を持っているとするならば、ひとたび物質的財貨の意義についての意識が目覚めた革命はたんなる国家的法秩序にとどまることはできず、必然的に社会秩序へまで向かうこととなるだろう。こうして革命はつねに社会革命へと発展する。このように述べて、シュタインはフランスで起こった社会革命の歴史の筆頭者としてルソーの平等思想を位置づけている。

### 3. シュタインのルソー・ノート

第2節が、予定以上に長くなったが、つぎに、シュタインのこのような思想を裏づけるシュタインのルソー研究の足跡を、かれのノートから探ってみることにしたい。改めて言うまでもなく、一般にノートは自分用につけられるものであり、シュタインもその例外ではない。かれはここで数多くの略号を用いている。たとえば、dhrはdaher、FrhtはFreiheit、語尾のhはheitでlはlich等々、その他、alsやsichなども特殊な記号で表されており、以下に読み誤りの可能性があることを予めお断りしておきたい。

さて、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州立図書館に所蔵されている、1843年から54年のあいだにシュタインがとったと思われるノートのうち、ボックマンによる整理番号I.1.7:02のノートの第43葉にルソーの『人間不平等起源論』からの、第44葉から47葉にルソーの『社会契約論』からの抜き書きとメモがある。『社会契約論』については、1838年版のフランス語テキストをシュタインは所蔵している。所々にペンによる下線が敷かれているが、シュタインは通常ほとんどいつも傍線や抜き書きを鉛筆で行っているから、ここにある傍線がはたしてシュタインによるものかについては疑問が残る。一箇所だけ明らかにシュタインのものとなる傍線があり、それは、第2篇第10章の末尾にある、「私には、いつかこの小島〔コルシカ島〕がヨーロッパを驚かすような予感がする」という、ナポレオンを想起させる箇所である。もちろん、これだけではシュタインがルソーをどのように理解したのかわからない。

『人間不平等起源論』のノートは1葉2ページに記されている。ルソーのこの書が最初にアムステルダムで出版されたのは1755年であるが、シュタインはこれを1754年と記している。右欄外にシュタインは本書の由来に言及し、これがディジョンのアカデミーから提示された懸賞問題に答えて書かれたものであり、賞を得たのはルソーではなくアベ・タルベールであること、かれの論文は1754年に印刷され35ページである、と書いている。ここで言う「かれ」がルソーを指すのかタルベールを指すのかは不明だが、ルソーの論文がジュネーヴで印刷されたのが1754年であることは事実である。書誌学的には本書の刊行年を1755年とするのが一般的だが、シュタインがなぜ公刊年ではなく執筆・印刷年にこだわったかはわからない。ジュネーヴとのルソーの確執にどこか共感するところがあったのかもしれない。

シュタインは、序文、本文冒頭、第1部、第2部の順番でごく手短かにドイツ語で本書の要旨を書

き出しているが、人間の自然状態を中心にメモをとっていると思われる点が独自と言える程度で、他に特筆すべきことはない。言語論の箇所ではコンディヤックの『文法論』を挙げ、また、第2部の有名な冒頭一節「或る土地に囲いをして、これはおれのものだ、と宣言することを思いつき、それをそのまま信じるほどおめでたい人びとを見つけた最初の者が、政治社会の真の創立者であった」をフランス語のまま引用し、右欄外にパスカルの『パンセ』第1部第9章<sup>53</sup>節(ブランシュヴィック版<sup>295</sup>節)「『この犬はぼくのものだ』と哀れな子どもたちは言う。『ここはぼくが日向ぼっこをする所だ』と。ここに地球全体の侵害の始まりとイメージがある」を引用しているのが目立つくらいである。

『社会契約論』のノートは、フォリオ4葉8ページにまとめられている。他のノート同様に、1ページが左右に分けられ、左にルソーの著作からのドイツ語による要約ないしはフランス語原文の引用、右側に関連するメモ書きがある。第1編第1章から順に注目すべきと思われる箇所についてのみ取り上げることにしたい。なお、引用文中、ギュメで記した箇所はフランス語で書かれている箇所である。

第1編第1章はつぎのように書き取られている。「自由は不自由に変えられた。どのようにしてこれが生じたか、私は知らない。何がそれを正当なものとするか」という課題が示される。ここではいまや暴力は完全に排除されるべきである。社会秩序は神聖な権利であるが、それは自然によってではなく、諸々の約束によって根拠づけられる。これらの約束がどのようなものかを知ることが問題である。」これに関してシュタインは右欄外に、「歴史においても事物の成り行きは事物の本質に基づくこと、それゆえ、国家の変遷もそれにふさわしい根拠を持っているとする思想が、ルソーにも『百科全書』派全体にも欠けている」という注をつけている。さらに、「イギリス学派とドイツ学派の本質的な違いは、前者の実証的な内容にあるのではない。契約の状況は古い、かつては存続するものによってのみそれは説明されるかまたは根拠づけられるかしたが、いまや存続するものの状況に規定されるべきである」という注記も見られる。第2章は最初の社会としての家族についてであるが、ここでの欄外にグロチウスの名を挙げ、「事実によって権利を確立する」とし、ホッブズも同じであると書いている。また、ダランベールの言葉「公法についての学者の研究はしばしば悪習の歴史にほかならない」をフランス語で引用しているが、これはルソーの原著にも見られる注記である<sup>(7)</sup>。第3章は最も強い者の権利についてであり、ここでは一言「権力は一度だけ権利となる」としてのみ要約され、第4章は奴隷についてであり、ここも「人民の奴隷状態にいかなる根拠も存在しない」の一言に要約されている。そして第5章は「つねに最初の約束に戻らなければならないこと」と、原著の章題をそのまま書いただけで要旨も記されていない。

第6章は社会契約(paite social)についてである。ルソーの原文は、日本語に訳せば「各人は、万人と結びつきながら、自分自身にしか服従せず、以前と同じように自由のままである。これが根本的な問題であり、その解決を与えるのは社会契約(contrat social)である」だが、シュタインはこれをドイツ語で「その課題：各人は、万人の言うことを聞くことで、実際には自分自身の言うことを聞くだけであるべきである。解決：各人は一般意志に完全に身を委ねる。そして、そのことによ

て、この意志の不可分の部分となる」と要約している。さらにここに欄外注記を設け、「フィヒテはこれを越えている。絶対的で同時に契約に即した所有における矛盾」と記している。これが何を意味するか詳細は不明であるが、フィヒテの『封鎖商業国家論』等に見られる契約論が念頭にあったかと思われる。シュタインは、本書も含めフィヒテの著書を4冊所蔵しており、とくに『封鎖商業国家論』にたくさんの書き込みをし、また下線を敷いており、この著作を熟読したことがうかがえるからである。

第7章は主権者についてであり、「各個人は、個体と国家の一員という二重の関係にある」とし、ルソーの言葉「ひとは自由であるよう強いられている」をフランス語のまま引用している。ここに欄外注記として、同じくルソーの本書第3編第13章から「臣民と主権者という語は同一的の相関にあり、その理念は、市民という一語で結びついている」を引用している。「臣民」すなわち *sujet* は、「主体」とも訳され、ミシェル・フーコー以来とくに注目されている言葉であり、近代的な主体性が通常思われているほど良い意味でつねにあったわけではないことはいまや周知のことであるが、マルクスの「市民」概念も含めて、ここは注目すべき箇所である。第8章は社会状態についてで、「自然状態から社会状態への推移」とのみ記されている。第9章は土地の支配権についてであり、「所有は社会状態から生じる」と書かれている。

つぎに第2編に入るわけだが、ほぼ以上と同じような具合であるので、紙面の都合に鑑み、以下省略する。第3編第8章にルソーの労働論があるが、この欄外にシュタインは一言「労働の理念が欠けている」と記している点のみ指摘しておきたい。また、最後の第4編第8章の欄外注記には「僧侶と神学者を区別しなければならない」として、人格的宗教と国家宗教のちがいについて述べている。

## 4. まとめ

シュタインのルソー研究について調べた結果、シュタインはルソーを、フランスにおける平等原理の発展を促した前世紀の哲学思想家の中心人物として捉えていることが明らかになった。法哲学史でのルソーの扱いは軽いが、それはシュタインが法を国家の問題として捉えるのに対して、ルソーらフランスの思想家の活動がもたらした社会の問題に関わっているという、いわば場のちがいによるものと思われる。フランスにおける平等原理の発展でのルソーの重要な役割についてのシュタインの理解は、シュタインのルソー・ノートによって間接的に裏づけることができた。というのも、たしかにルソー・ノートには際立ったかたちでの特殊な解釈や注目すべき発言は見られないが、さきに論じたギゾーとアリストテレスと比べると、シュタインがルソーのとりわけ『社会契約論』を詳細に読んでノートをとっているという事実から、それはうかがうことができると思われるからである。

【註】

1. Lorenz Stein, *Die Municipalverfassung Frankreichs*, Leipzig 1843, S.3.
2. Heinz Taschke, *Lorenz von Steins nachgelassene staatsrechtliche und rechtsphilosophische Vorlesungsmanskripte*, Heidelberg 1985.以下、本書からの引用はTaschkeと略記する。
3. Lorenz Stein, *Der Socialismus und Communismus des heutigen Frankreichs. Ein Beitrag zur Zeitgeschichte*. Leipzig 1842.石川三義・石塚正英・柴田隆行訳『平等原理と社会主義 今日のフランスの社会主義と共産主義』1990年、法政大学出版局。以下、本書からの引用はScと略記し、訳書のページにはjという略号を付す。
4. 詳しくは、拙稿「ローレンツ・シュタインの人格性概念について」1992年、『東洋大学紀要教養課程篇』第31号234～211頁を参照願いたい。
5. 人格性と人格との区別はカントに由来する。拙稿「マルクスの人格性概念について」1999年、『理想』662号86～95頁で詳述した。
6. 「現代の社会運動」(Der socialen Bewegungen der Gegenwart, in: *Die Gegenwart. Eine encyclopädische Darstellung der neuesten Zeitgeschichte für alle Stände*. Bd.1., Leipzig 1848, S.299-326 (anonym). 「ドイツの社会主義」(Der Socialismus in Deutschland, in: *Die Gegenwart*. Bd.7., Leipzig 1852, S.517-563 (anonym).
7. 第2章に書かれているルソーの言葉「アリストテレスは正しかったが、かれは結果を原因と見なした。奴隷に生まれた人はみな奴隷として生まれた。これ以上確かなことはない」は、本稿前号で言及したように、シュタインによって「アリストテレスとプラトン以前のギリシアの国家学理論」(Die staatswissenschaftliche Theorie der Griechen vor Aristoteles und Platon und ihr Verhältniss zu dem Leben der Gesellschaft, in: *Zeitschrift für die gesammte Staatswissenschaft*, 9.Jg.,1853)で引用されている。なお、ついでながら、ルソーからの引用は拙訳のほか、岩波文庫の桑原武夫・前川貞次郎訳を使用させていただいた箇所があることを、訳者に感謝しつつお断りしておく。

【Abstract】

## Wie studierte der junge Stein die Geschichte der sozialen Gedanken? (3)

Takayuki SHIBATA

Lorenz von Stein studierte in den Jahren 1841 bis 1843 in Paris nicht nur die französische Rechtsgeschichte, sondern er las auch viele Werke über die Geschichte der sozialen Gedanken, z.B. die Werke von Aristoteles, Montesquieu, Rousseau, Guizot, Adam Smith, List und vielen anderen.

Ich erforschte Steins Verhältnis zu Rousseaus Theorien anhand von Steins Exzerpten und persönlichen Notizen zu Rousseaus "Du contrat social" und "Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi hommes". Diese Quellen liefern einen sehr genauen Überblick über Steins Einstellung zu Rousseaus Werken.

Nach Stein lebt in Frankreich seit Rousseau die Idee der Freiheit im Volk und es ist laut Stein anerkannte Tatsache, dass die Revolutionen seit 1789 eben Ausbrüche und Krystallisationen dieser Ideen sind. Stein interessierte sich besonders für Rousseaus Konzept der Gleichheit. Rousseau war der erste, der die Forderung aufstellte, dass die von der bisherigen Philosophie abstrakt und begrifflich anerkannte Gleichheit praktisch ins Leben hineingeführt, und durch die Republik im Staate, sowie durch die Erziehung in der Gesellschaft, verwirklicht werden müsse.

\* \* \*

Bei der Verfassung dieser Abhandlung habe ich den Nachlaß Lorenz von Steins in der Schleswig-Holsteinischen Landesbibliothek und die Bücher Steins in der Bibliothek des Lorenz-von-Stein-Instituts für Verwaltungswissenschaften an der Christian-Albrechts-Universität zu Kiel benutzt. Der Landesbibliothek und dem erwähnten Institut danke ich sehr. (Alle Bücher Steins findet man jetzt in der Sch.-Hol. Landesbibliothek.)